

2021年4月4日 久宝教会 イースター（復活日）礼拝

メッセージ「涙の後ろから呼ぶ声がある」

牛田匡牧師

聖書 ヨハネによる福音書 20章1-18節

「イースターおめでとうございます」と言っても、この言葉を私たちはどれだけ実感を持って、言っているのでしょうか。それこそ、「クリスマスおめでとうございます」の方がまだ、日本社会には馴染んでいるように思いますが、クリスマスにしても、全ての人の救い主であるイエス様がお生まれになったということ、本当に実感を持ってお祝い出来ているかと、問われると、困ってしまうかもしれません。今から約2000年前に、パレスチナの地を歩まれたナザレのイエスという一人の人が、世間から見放されていた多くの人たちに、生きる希望を語り、力付け立ち上がらせた、という^{かど}廉で、時の権力者たちから^{うと}疎まれて、十字架に架けられて殺された、というのは、聖書以外の歴史資料にも記されているお話です。そして、当時のローマ帝国の圧政、植民地支配に対して反旗を^{ひるがえ}翻し、民衆に^{ほうき}蜂起を促した人々は、何人もいて、その度にローマ軍は圧倒的な武力を持って、それらを鎮圧し、見せしめとして、それらの運動の首謀者たちや、それらに関わった人々を十字架に架けました。ですから、当時、十字架に架けられたのは、決してイエス様だけではありませんでした。しかし、イエス様と他の指導者たちとの最大の違いは、イエス様に従った人々は、イエス様が十字架に架けられて殺された後にも、その運動は終わらなかった、むしろ、より盛んになって行ったということでした。他の指導者たちによる運動は、その指導者がローマ軍によって逮捕され、拷問され、十字架で処刑されると、散り散りになり、やがて消滅して行きました。しかし、イエス様に従った人々、いわゆる「イエス運動」だけは、そうではありませんでした。歴史学者に言わせると、それが最大のミステリー、謎であり、神秘であるというわけですが。そしてキリスト教では、それを「復活」「死からの引き起こし」があったから、と説明しています。

今日は4月4日です。すっかり暖かくなって桜の花も咲き、多くの保育園でも入園・進級式が規模を縮小して行われたりしました。とても気持ちの良い季節です。しかし、私の中にはどうしても、この美しい春を素直に喜べないような、心の中に引っかかるものが、ずっとありました。それは2月から続いているミャンマーでの暴力、クーデターを起こした国軍による民間人の虐殺のことです。テレビのニュースでも報道されていますが、インターネットでも、毎日のように現地からの様子が、SNSで報告されていま

す。クーデターを起こした軍に対して、民間人たちが非武装・非暴力で抗議するのに対して、軍人からは銃口が向けられ、多くの人の血が流されています。2月から既に550人以上の人が殺されたという記事もありました。

私にとって、ミャンマーは遠い国であり、詳しいことは何も知りませんでした。ですが、「だからと言って何もしなくてもいいのか」、「いや出来るとしたら何が出来るのか」、「そもそも何も知らないのに、何を言えるのだろうか」など、自問自答を繰り返すばかりでした。そんな中、友人から聞いたのは、今のミャンマーの軍政に対して、日本は決して無関係ではないこと。かつて戦争中に日本がビルマを占領し、暴力で支配したことに抵抗するために、ビルマ国軍は組織された。当時、日本軍がビルマで行った暴力行為が、その記憶、DNAの中に刻まれている。今、ミャンマー軍が民間人に対して行っている蛮行は、かつて日本軍がビルマの人々に対して行った事と同じだということでした。70年以上が経っても、身体の奥底に刻み付けられた暴力の記憶は、決して消えないのだということを思わされます。日に日に多くの人々の血が流され、泣き叫ぶ声が響いています。そんなミャンマーの人々に対して、私たちが出来ることは、署名をしたり、献金をしたりすることしかないかもしれませんが、イエス様の復活を記念するこのイースターに、私たちは、ミャンマーの人々に対して、一体何を語る事が出来るのでしょうか。

今回の聖書のお話は、「週の初めの日、朝早く」(1)から始まっています。イエス様が十字架に架けられて殺され、お墓に埋葬されたのは金曜日の夕方でした。ユダヤ教では土曜日が「安息日」でしたので、人々は働くことが出来ず、イエス様のお墓を訪問することが出来ませんでした。そのため弟子たちは、安息日が終わるのを待ち、安息日が明けた3日目、日曜日の朝早くに、イエス様のお墓に急いで出かけていったというわけです。当時のお墓は、現代の私たちが日本で目にするような、火葬して、お骨を埋葬するという方法ではなく、また遺体をお棺に入れて土に埋めるという方法もなく、遺体を布で巻き、そこにいい香りのする香油を塗って、洞窟のような横穴に安置するという方法だったようです。そしてその入り口は大きな石で塞いであったそうですから、マグダラのマリアはその石をどうやって動かすつもりだったのでしょうか。ともあれ、マグダラのマリアがお墓に着いてみると、入り口を塞いでいたはずの大きな石は取りのけられていました。誰がいつ動かしたのでしょうか。他の福音書を見ると、イエス様の遺体が、弟子たちによって盗み出されないように、ローマの番兵が見張りをしていたとか、地震が起きて石が転がったと記されていますし、また

女性たちは中に入って遺体が無いことを確認したとも書かれています、石が取りのけてあるのを見たマグダラのマリアは、急いで仲間の弟子たち、シモン・ペトロたちへ知らせに走りました。「誰かが主を墓から取り去りました。どこに置いたのか、分かりません」(3)。というこの言葉には、マグダラのマリアの動揺が表われています。今、私に出来ることとして、せめてイエス様の遺体をきれいにしたかったのに、もはやそれすらも出来なくなってしまった……。ペトロたち、二人の弟子たちも急いでお墓まで走って行って、空っぽのお墓を確認しました。

「マリアは墓の外に立って泣いて」いました(11)。どうしてよいか分からなくなっていたのでしょうか。またもはや動こうにも動けない程に気力も無くなっていたのかもしれませんが。しかし、そのような深い絶望の所に、み使いが現れました。そして、問いかけました「なぜ泣いているのか」(12)。マリアは答えます「誰かが私の主を取り去りました。どこに置いたのか、分かりません」(13)。そう答えながら、マリアは後ろに人の気配を感じたのでしょうか。後ろを振り返り、園の番人、園丁と思しき人に言いました。

「あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか、どうぞ、おっしゃってください。私が、あの方を引き取ります」(15)。私の大切なあの方を、勝手にどこにやったのか……。そんな思いもあったかもしれませんが。ですが、その人が「マリア」と彼女の名前を呼ばれると、彼女の目は開けて、その人が復活されたイエス様だったということが分かりました(16)。そして彼女は、それから他の弟子たちの所へ行って、「私は主を見ました」と告げました(18)。

このお話からは、イエス様の「復活」とは、所謂「死んだ肉体が生き返ること」、「元通りに元気になって動き出すこと」ではない、ということが分かります。もしも「復活」が、死んだ肉体の単純な蘇生、生き返りであったなら、このマグダラのマリアは最愛のイエス様の顔を、全く見ず知らずのおじさんである園の番人、園丁と見間違えたのでしょうか……。そんなはずはありません。復活のイエス様、死から引き起こされたイエス様は、生前の肉体を離れ、ありとあらゆる人の中に、あらゆる人の顔と手を介して、今も生きているのだと思います。マグダラのマリアが泣いている後ろから、その名を呼ぶ声がありました。そして、その声に応じて後ろを振り向いた時、復活されたイエス様を、彼女はそこに見出すことができました。

死から引き起こされたイエス様は、白い衣を着て光り輝く姿で、マグダラのマリアの前に現れたわけではありませんでした。彼女の後ろから園の番人として現れました。「園の番人」や「園丁」というと、現代で言ういわ

ゆる「墓地の管理人さん」のように思うかもしれませんが、それは墓穴を掘り、遺体を安置したり、移動させたりする職業です。遺体という「死の穢れ」に直接接触するわけですから、それこそ縁起の悪い、穢れに満ちた被差別の労働者でした。まさかそんな人が、あのイエス様だとはとても思えない。こんな姿で現れるはずがない。復活のイエス様は、そのような人として現れ、そして彼女に声をかけられました。復活のイエス様、死から引き起こされたイエス様は、まさかそんな所にいるはずがない、そんな人として現れるはずがない、と私たちが思うような所に、私たちの予想を越えた形で現れるのだ、ということ、このお話は私たちに伝えてくれているのではないかと思います。

今、ミャンマーで強大な暴力によって多くの血が流され、殺され、人々は泣き叫んでいます。「神は一体どこにいるのか。どうして、こんな不正義、悪を見過ごしているのか」。そんな叫びも聞こえてきそうです。イエス・キリストが、その十字架によって贖あがなわれた罪とは、「私たち一人一人の日々の細やかな悪事や悪行、罪状書きが、身代わりの代罰によって帳消しにされました」ということではなく、大昔から続いている、人類の持つ抑圧と差別など、あらゆる暴力の行きつく先である「死」、「命を終わらせるもの」に終止符が打たれたということ、死からの引き起こし、立ち上がりがあり、私たちはそんな「死に打ち勝つ命」「死を越える命（永遠の命）」を生きることができる、ということなのだと思います。暴力の中でも、諦めることなく立ち上がり続け、声を上げ続けている方々がおられます。今、苦しみのただ中におられる方々の隣にも、復活のイエス様はおられるはず。一見するとどこにいるのか分からない。どこにも神様の姿は見出せない。けれども、そんな泣き叫ぶ人々の後ろから呼ぶ声があるはず。私たちはその小さな声、それこそ「沈黙の声」（列王上 19：12）に耳を傾けられるようでありたいと願います。

新年度が始まりましたが、コロナ禍はまだまだ続きそうです。とくに阪神間での感染者数は急増しています。日本のワクチン接種率は世界最低レベルですが、たとえワクチンを接種したとしても、マスクの着用や消毒、互いに距離をとることなどは、今後も数年間は続ける必要があるとも言われています。それらのことを心に留めながら、新年度も神様が創られた全ての命を大切にす歩みへと、進んでいきましょう。願わくは今、泣いている人の隣にあって、復活のイエス様が呼ばれる声を、一緒に聞いていくことができますように。また、神様が全ての人と共におられるということ、私たちが証しする者へと変えられて行きますようにと願っています。